

重慶

2012.04.19

香港 花木

(1) 重慶の消費市場

重慶市の経済成長率は2010年に17.1%と天津市と並んで全国第一、2011年も16.4%と天津市に次ぐ第二位であり、最近発表された2012年第一四半期の成長率もやや低下したとはいえ14.4%と全国第三位の位置につけている。経済規模も2011年について1兆元（約13兆円）を超え、念願の「1兆元クラブ」の仲間入りを果たしたと囃された。

北海道とほぼ同じほど広大な面積を持つ重慶市は、農村人口の割合が多く、一人当たりGDPの水準では依然として全国平均並み（約5000ドル）でしかない。しかし、都心部だけを見れば、例えば渝中区の一人当たりGDPは既に11000ドルと上海に近い水準に達しているとされ、日系企業も2008年にユニクロ、2010年にローソン、2011年には無印良品が進出し、現在ではいずれも市内に複数店舗を構えるようになってきているほか、台湾資本の高級スーパーOle'sも進出する等、沿海部に準ずるほどになりつつあるようだ。



↑ 市中心部「解放碑」付近の様子。高層ビルやブランドショップが立ち並ぶ。



← 郊外の新興高級住宅地「南坪」の商業ビル。無印良品やユニクロも入居している。

(2) 大規模都市開発と資金源

重慶を訪れて目につくのがその大規模な都市開発である。長江に深く削られた高低の大きい土地にもかかわらず大規模な橋梁やトンネルを使って高層ビルの間を縫うように高速道路やモノレールが走り、大劇場や展示場等の意匠を凝らした建築物や緑あふれる大規模な公園、きらびやかなイルミネーションまで、重慶は他の都市より明らかに景観に気を使い、同時に大量の資金を投じている都市である。



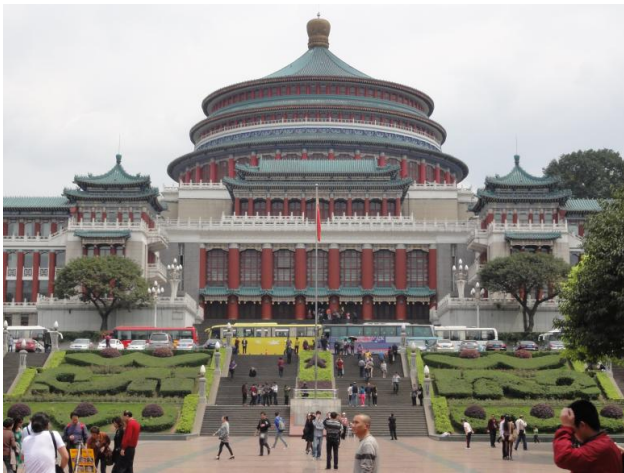
↑ 市民の足となったモノレール（上）。重慶中心部のスカイライン（下）。

「重慶モデル」の看板政策である農民の都市戸籍転換や、そのため彼らに提供する大規模な公共住宅建設はそれだけでも膨大なコストを伴う投資プロジェクトだが、重慶ではそれに加えて大劇場や展示場等の大規模建造物等の建設運営や道路公園の緑化のために膨大な資金が投じられてきた。その規模は昨年1年間だけで7600億元（約10兆円）にのぼる重慶の固定資産投資の「大部分」を占めると見られ、三月まで市の書記を務めていた薄熙来氏の指示により、市傘下の都市開発公社等が事業主体となって実施してきたものである。18日付けWSJ報道によれば、新たに書記に就任した張徳江氏は、果たしてこれらが本当に償還可能性のあるプロジェクトであったかどうかについて調査を始めたとされており、目下その結果如何が大いに注目される展開となっている。

<http://online.wsj.com/article/SB10001424052702304331204577351591015830280.html>



←豪華だが表札一枚すらない重慶市政府。入口の警備も厳重だ。



←重慶市政府向かいの人民大礼堂。かつてはこの前の広場が「唱紅歌」の場となっていたという。

(3) 薄熙来氏時代のスローガンは健在

重慶の一般市民にとって薄熙来氏の評判は依然として良いようだ。知識層レベルでは、今回メディアを通じて取り上げられた腐敗や刑事問題を重視して「どれほどよい仕事をした人であっても法治に服さなければならない」とする評価が多いようだが、一般市民はむしろ「多少の腐敗は当たり前。要は市民にとって良いことをしたかどうか」が重要だ。それまでの書記は市民のことは眼中になかったが、薄熙来氏は少なくとも市民を視線の先に置いていた」とする高い評価は消えていないようである。

後任の書記となった張徳江氏も、こうした薄熙来氏の評判を考慮してか、少なくとも現在のところ重慶市の街頭風景は薄熙来氏時代とあまり変わらないようにしているようだ。例えば薄熙来氏が唱えた「五つの重慶」スローガンは、都心部では多少少なくなった印象があるもののモノレール駅や工事現場等で依然掲げられていたし、特に市民生活に密接に関連する治安については、薄熙来氏の下で王立軍前公安局長が推進した「交番」制度（警察官が街角に出て積極的に市民と交流するやり方）は引き続き継続されており、街のあちこちに警察官の詰め所があり、そこには例えば「病気の少女を病院に送り届けた」等警察官による市民救助を称賛するポスターが掲示されていた。



←健在な「五つの重慶」スローガン



←街角に出たの警備は王立軍氏が主唱したやり方だ。

(4) 西永工業園区

さて、最近の重慶市の経済面における快進撃を支えてきたのは、従来の機械工業（長安フォード、長安スズキ等）に加え、急増するノートパソコンの生産がある。重慶市でノートパソコンの生産が始まったのは2009年のことに過ぎないが、今ではヒューレットパッカードや台湾エイサー等を中心に年産約2500万台のノートパソコンを生産し、「アジア最大のパソコン生産基地」になったと言われている。

このパソコン生産が行われているのが、重慶市西部にある「西永工業園区」である。ここには大きな保税區が設けられており、その保税區の中にHP（Hewlett-Packard）製パソコンの代理生産（EMS）を行う鴻海傘下の富士康（Foxconn）の重慶工場が立ち並んでいる。前回、2011年3月に訪れた際には既に生産を開始しつつもまだまだ工事が盛んに行われている段階で全体が雑然としていたが、今回2012年4月に再訪したところ、既に工場建

屋はすべて完成し緑化もされていたほか、従業員寮や付帯施設（公園・運動場等）も概ね整備が完了していた。



←雑然としていた工場（2011）



←緑化され従業員寮もできた。
（2012年）

富士康は2011年に深セン工場で発生した連続飛び降り自殺事件等もあつて労働環境を著しく改善させているようだ。先日、委託元であるアップルが第三者機関に依頼して労働環境調査を行いその結果を発表していたが、一部にまだ残業が見られるものの全体的な労働環境は概ね満足できるものと評価されていた。中国では労働者は残業させるものという意識がまだまだ強く、一部の労働者にはむしろ自らそれを望む者もいることは事実だが、こうした事情も今後給与水準の向上とあわせて今後急速に変化していくのではないだろうか。

従業員寮には、寮内に HP 製品販売店が開店したことを告げる垂れ幕が掲げられ、従業員は割引料金で購入できるとされていた。富士康の従業員は、既に、HP にとって単に製品の作り手であるだけでなく、同時にその大切な買い手にもなっているのである。



←ゆったりと建てられた寮



←寮の中庭でくつろぐ従業員



←従業員寮に隣接して設けられた運動場

(以上)